
生涯貴女を守ります

亜紅亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生涯貴女を守ります

【Zコード】

Z1958Z

【作者名】

亜紅亜

【あらすじ】

ある日おこった事件、特定の人物だけを狙う連續殺人だった。それはある男の逆恨みからくるものだった。その男にに蘭が狙われて――?

「「めんな…蘭」

新一の悔しげな声が病室に響いた

新一の握っているシーツは引き裂かれんばかりに握られていた：

「「昨夜、女子高校生が男に刃物で襲い掛けられ重傷を負う事件がありました。警察の調べでは例の連續殺人犯によるものだと判明しました。」

今までの被害者は共通点があり、皆死亡するまで犯行に及んでいることが分かりました」「

「…怖いね。新一」

蘭は工藤邸に訪れ一人でゆつたりと田畠田を過ぐしてこないとひるぎだつた。

「「そうだな。俺、昨日警視庁に行つたから田畠警部に聞いてみたんだけど…」

その共通点が、空手をやつてる、つて事なんだよ」

「つあ、あたしもじやない…」

「ああ、空手をやっている女子高校生なら上手い、下手関係なく殺している。有段者の人も殺されちゃったからな…」

新一は悔しそうに言つた

その目にはいつも犯人を追い詰めるときなどの鋭い眼差しだった

「だから蘭も気をつけるよ。犯人がこの辺にいないとは限らないんだからな」

「うん…」

蘭は明らかに不安そうだった

「大丈夫だよ。心配すんな！お前は俺が守つてやつから！」

そう言って蘭を抱きしめた

だが、この二人は恐怖を味わうことになる

互いの優しさが互いを傷つけあうなんて、知る余地も無しで――

1話（後書き）

他にも連載あるんですね…

大丈夫です！

コレは結末もう頭の中にあるんで！

明日にでも終わるかもです！！！

例の連續殺人犯のニュースを見た日から、新一と蘭は必ず登下校を共にするようになっていた

その日も学校から夕飯の食材を買つため、商店街を通りながら工藤邸へ向かっていた
さすがに町のあちこちに警官が大勢いた

新一らが歩いている商店街もそうだ

「つづつづく…。見つけたぞ…。毛利蘭」

男は不気味に笑つた

その手には空手経験者のリストが握られていた
住所から何まで。写真もついている

「まつてろよ、桜。今すぐお前を貶めた悪魔達を、地獄へ落としてやるから。
…この俺がな」

ポケットから果物ナイフを取り出し、刺す、殺すタイミングをつか
がっていた

警官の視線もはずれ、ターゲットはこいつに附いていない
運良く一緒に居る男は俺のいる側にはいない

チャンスだ

と、足を踏み出しあととした瞬間過去がよみがえる

――もう限界だよ――
――なんであたしがこんなことにならなくちゃいけないの?
――助けてっ――お兄ちゃん――――

……可愛い妹

俺は助けることが出来なかつた
あいつは俺を信じて待つっていたのに……！

自分の無力さに眩がした

しつかりしる。

まだ桜を苦しめた奴は分かつてない

……いや。苦しめた奴じゃなくてもいい
空手という、くだらないものをやつていた奴なら――――――

思い直し、ナイフを握る力を込める

今日も俺の手は桜を苦しめた奴の血で汚れる

どこからか声が聞こえた

オオカミのつなり声のよつた——腹のそこから出た声

声の先には例の連續殺人犯

警部から聞いた特徴とぴったり合致する

ナイフを持って蘭めがけて走つてくる

——ヤバイ！！！

そう思つたときには遅かった

犯人が振り翳したナイフは蘭の胸に、恐怖で動けない蘭の心臓の位置へと向けられていた

「蘭つ！！！！」

もう駄目だ！
私…死ぬんだ

そう考え、目を堅く瞑つた

しかし、どこにも痛みは無かつた
恐る恐る目を開けてみると……

目に入ってきたのは腹から血を流した新一だった

「新一！新一い！……！」

「つか。男のほつか…。畜生！…！」

蘭の胸目掛けで振り下ろされたナイフだったが、新一が来たことに
より手元が狂い腹にいつたのだ
そう言って犯人は逃げていった

そんな中でも新一の腹からはとめどなく血が流れていった

「っく…。う…蘭、大丈夫だから…」

「何が大丈夫なのよ…！…なんで…あたしを庇つたのよ…」

「もう…んが、…くのは…だ…から」

もう言つことすまつきつしなくなつていき、終いには意識をなくし
てしまつた

「新一…新一…！」

もう呼びかけても返事が無い

蘭に出来ることは、救急車が来るのを待つだけだった

「新一……」

見た目より新一の傷は浅く、命に別状はないという
だが、蘭の心についた傷はそんなに簡単に癒されるものではなかった
もう蘭の耳には新一が刺されたときから、何も聞こえていなかつた

「新一が私のせいで、

そのことが頭から離れなかつた

「新一……」めんね。ごめんね。私の……せいで……」

頬を涙がつたう

もう、苦しかつた

新一が自分のために怪我をしたり、危険にさらされるのが

精神的にも蘭はどん底に落ちてしまつた

「うめん...ね...」

「…？」

「おお工藤君ー・気がついたか！」

「田暮…警部へ…どうしてここに」

「工藤君が刺されたと聞いて飛んできたんだよー・ああ、大事に至らなくて良かった」

新一は何かの違和感を感じた

警部の様子、少し動搖している、それに俺の目をまっすぐ見ない

蘭もいない

あいつの性格なら俺がおきるまでいるはずなのに…

警部の口から発せられた言葉は俺の思考をとめた

「警部」

「何だね？」

「わざわざかくせんにまつりへだてこ」

警部がヒュウッと息を吸い込んだ

「…まったく、君にはかなわないな

「…蘭に何かあつたんですか？」

「……」

「はつてくだわー」

「蘭君は精神科にいる」

4話（後書き）

今日は短い><

精神科……？ なんで……？

「…君が自分を庇つて刺されたところを見てね、ショックを受けてしまつたんだよ。

ね
」

— そん
な

何故だ

何故た何故た何故た

許せない

あの犯人、捕まえて、どうちめてやる―！

そう新一が怒りに燃えていたとき、日暮の携帯がなつた

「はい。目暮。つ何？！犯人が捕まつただと？！？！」

？」

その場の空気が凍りついた

捕まつた

蘭を、蘭の気を狂わせた犯人が
何人もの罪無き人を殺してきた犯罪者が……！

「…今は米花署に…。分かった」

「？なんだね」

「僕も行かせてください」

「なつ！？何を言つとるー君は刺されたんだぞ？！
命に別状は無いとしてもー今日は安静に「警部ーーー！」

「お願こしちゃ」

新一はそう言い、頭を下げる

最初は渋っていた警部だが、新一の根気に負け、連れて行くことにした

取調室の前

「僕に行かせてください」

「しかし、奴が…」

「構いません」

取調室には刑事ではなく、探偵が入っていった。工藤新一が

「…さつきぶりだな」

「…生きてやがったのか」

もう二人の間には火花が散っている

「お前のせいで蘭が傷ついたんだぞ。…なぜ空手をしている人ばか
り狙う」

「…妹だよ」

「妹？」

「ああ。中学1年の可愛い奴だった。生きてたら高校2年だよ。
…桜つて、ってな、やったこともねえのに空手部に入ったんだよ」

いきなり話し始めた犯人に新一の鋭い目が向けられていた

「周りの奴らほど上手くは無かったけど、少しずつ上達していくのが楽しそうで…楽しそうで…」

…なのに…！…周りより下手な桜が初の大会で負けたのを同じ部活の奴らが…！」

話しながら、嗚咽、悔しさがあふれ出てくる

「お前が負けたせいで学校の名が汚れた、などと罵ったんだ…！…！…でも本当のことだから桜も反論できなかつた
それからだ、桜がいじめられはじめたのは

「そして…その年の冬に血殺したんだ！！！
俺は、桜を苦しみから救つてやれなかつた！だから…今、桜を苦し
めた奴ら、空手自体を潰すんだよ！…！」

新一は顔を伏せたまま、低い声で語った

「理由がどうであろうと、殺人はやつちや いけねえ。 てめえはその
いけねえ事をやつたんだ！」

「ひらり、でも、ひらりの罪は償つても、

そういう終ると新一は部屋を出て行つた

それと入れ替わりに違う刑事が入り簡単な聴取が始まつた

「工藤君」

「蘭が傷ついたとしても、犯罪は犯しちゃいけないんですね……でも……」「う

悔しくて仕方が無かつた

ギイ

取調室のドアが開いた

犯人が連れられて出てきたのだ

「おー、工藤新一」

「…なんだよ」

「刺されたのがおめえでよかつたよ」

その瞬間、新一の目が獣のような鋭い目に変わった

「蘭つて奴が刺されると、おまえの梅しそうな顔も、そいつの気が可笑しくなったのもみれねえしな…!…!」

ギャハハハハと笑い出した

そして、両脇にいた刑事を振り切ると懐に忍ばせていたナイフを取り出し新一に向かつってきた

振り上げた

しかし――

新一がナイフを奪い取った

「形勢逆転つてか」

新一が不敵に笑う

そして犯人を壁まで追いやり、ナイフを振り上げた

「上藤君ッ……」

田畠警部の声が木靈する

犯人がナイフを振り上げた瞬間、俺はその手を掴みナイフを奪い取つた

そのままあたらないきつぱりの所で振り回し、壁へと追いやつた

このまま頭に刺したら、こいつは死ぬんだろうか

そんなことが頭を巡る

ガツ

犯人の顔の真横の壁に刺さつた

「ひつ……や、やめてくれ……やめろ……助けてくれ……」

！」

犯人がそう俺に叫ぶ

そんな言葉を無視し、もう一度ナイフを振り上げる

結局振り上げたナイフは壁に刺さるだけだった

背中を壁にこすり付けて

犯人が座り込んだ

ズズズズ…

「…なにが助けてくれだ」

「…へ？」

「助けてくれだと？やめろだと？てめえは殺してきた人たちから同じ言葉を言われたんじゃねえのか！…？…？…！」

「言われたさ。だからどうしたつ」

犯人は新一の気迫に押されたのか顔を引きつらせていた

「そんな言葉を無視して、殺したんだ。

お前が味わった恐怖をお前の我慢のせいで！沢山の罪無き人が味わつたんだ！

…こんなのツ味わわなくていいのに！殺された人だけじゃなく、その人たちの家族、大切な人まで苦しめてんだ！！！…それがわからねえのか！！！」

犯人はさすがにうつむき、何も言わなくなつた

「お前が妹さんを自殺に追いやつた奴らを許せなかつたように、一族の人たちはお前を許せないはずだ」

「だから

一生かけてでも償え。もしさむかうつけたら俺が直々に地獄へ
送り届けてやる

新一の声は今までに聞いたことの無いへりへり声へ、怒りがこもって
いた
その中には悲しみも混じっていた…

「すいません田暮警部。壁の破損代は払います。あとで請求書回してください」

「ああ……それは構わんが……。工藤君、犯人を殺す勢いで、びっくりしたよ」

「殺そうと思いましたよ。でも、犯罪者といつ奴らの血でせつかく綺麗な染まつていらない手を汚したくありませんから……。」

”毛利蘭さま”

病室のドアにかかっているプレートに書かれた名前が、蘭がここにいるということを示している

信じたくなかった

精神科なんて…

でも、真実から田を逸らすわけにもいかない

犯人が捕まつて、日暮警部から蘭のいる病院を教えてもらつたのに、なかなか行かなかつた

……！ うなつたのも俺のせいなのにな

いい加減ドアを開けないとこのままずっと後悔が頭の中で巡つてしまつ

…それは蘭のためにもやめよう

気持ちを入れ替えドアをノックしよう手を上げると――

ガラッ

部屋から出てきた看護婦

「あら。毛利さんのお友達？」

「あ。はい。あの、入つても大丈夫でしょうか？」

「ええ。大丈夫ですよ。でも何言つてもあまり反応は無いですよ。ショックな出来事を目の前で見たのが原因らしいですけど…」

看護婦の言葉が黒い塊となつて落ちてくる

「…蘭？」

蘭は外を見ていた。ベットにすわり

「蘭？俺だよ。新一」

「新一…」めんね。『めんね…』

蘭は新一を見ないで謝り続けていた

そう。蘭は新一が新一だと気付いていない――――

「「めんなさい」めん…ね…」

「…蘭つ！もう謝らなくて良いから。蘭は悪くないから…全部…俺のせいだから…俺が蘭を守れなかつた。ただそれだけなんだよ」

俺は蘭の手を握り祈るよつこ語つ

「じめんね……」

「だからつ謝んないで……蘭！」

覚悟はしていた

しかし、田の当たりにすると動搖を隠せない

「つ……蘭……本当に、じめんね……つべ」

頬を一粒の雲が伝づ

涙だ

その涙が蘭の手の甲に落ちる
何粒も何粒も

「じめんな……蘭つ」

そんな俺の耳に入ってきたのは信じられない声だった

よく知つてゐる幼馴染の、大好きな奴の声

「...新
—
?」

もつ謝りの言葉ではなく、俺に向けられた感情のこもつた声だった

7話（後書き）

あと一話へりこで完結です！
最後までお付き合いをお願いします（*^-^*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1958z/>

生涯貴女を守ります

2011年12月17日21時48分発行